

市外史跡探訪レポート

二〇一五年十一月八日

秋季市外現地学習資料 白杵市

右 田 幸 平

1. 白杵市歴史資料館

白杵市市浜の民間の、陶磁器コレクションを展示した施設だったが、閉鎖後に白杵市が整備。二〇一四年四月に開館。市が所蔵する古文書、絵画、典籍など三五〇〇〇点の歴史資料を展示している。幕府から豊後国の地図を作成する役目を任されていた白杵藩は、他藩から村の位置や地形、交通事情など情報を収集して地図を作成、幕府に提出していた。また他藩を通じて全国各地の地図を収集していた為、藩主の稲葉家から寄贈された所蔵品は古地図だけでも一〇〇〇点に上り、すべてが県有形文化財に指定されている。その種類は九州図、日本各地の城や城下町絵図、世界図にまで及ぶ。ロビーからは白杵川、大橋寺、松島神社を望むことができ、とても

眺めがいい。

常設展示室

展示室1 白杵藩の歴史について展示紹介。床には絵図の複製パネルが敷かれており、絵図の上に立って当時の精緻な絵図を楽しむことができる。

展示室2 戦国時代の大友宗麟から近世の白杵稲葉藩について、城と町の変遷を絵図と考古資料、発掘調査出土品などで展示紹介。

特別展示室（展示室3・4）

白杵のみならず日本各地の様々な資料を展示。日本史における白杵をみることができる。

2. 白杵城跡（県指定史跡）

一五八二年（永禄五）大友宗麟によって築城されたという説が一般的であるが、一五五六年（弘治二）に小原鑑元の反乱の際に宗麟が丹生島に逃避していることから、この頃には軍事施設が作られていたと考えられる。別名、丹生島城、巨亀城、亀城、金亀城。現在は連郭式平山城であるが、築城当時は海城であった。宗麟が府内から移り、隠居城とした頃は

南蛮貿易などで栄え、実質的な中心地になった。一五七八年（天正六）に大友氏が日向の耳川の戦いで島津氏に大敗すると、豊後にまで北上してきた島津軍の攻撃を受けるが、このとき「国崩し」と呼ばれるポルトガルの大砲（フランキ砲）で撃退している。一五九三年（文禄二）以降、城主は福原直高、太田一吉と変わるが、一六〇〇年（慶長五）に美濃の郡上八幡から稲葉貞通が入封し、一八七一年（明治四）十五代の稲葉久通まで二七〇年間にわたり稲葉氏の居城として続いた。一八七三年（明治六）に廃城令によって取り壊され、臼杵公園として整備。春は桜の名所として花見客で賑わっている。卯寅口（うとのくち）門脇櫓、畳櫓をはじめ空堀、門跡、井戸跡などが残されており、大手門櫓が復元されている。本丸、二の丸（西の丸）が臼杵城跡として県指定史跡となっている。本丸と二の丸の間の空堀は、稲葉氏時代に整備されたもので北側には天守櫓があった。太田氏から稲葉氏に代わる頃には三十一基の櫓と七基の櫓門があったといわれる。時鐘櫓跡にある鐘突堂の鐘は元禄時代のものである。

3. 旧臼杵藩主稲葉家下屋敷

正式名称は「旧稲葉家別邸」。江戸時代のこの付近は三の

丸にあたり、福原氏、太田氏の時代に「祇園州」と呼ばれる対岸の埋め立て工事が進み、三の丸が築かれた。三の丸と丹生島の間には「古橋」と「今橋」という二つの橋が架けられていた。三の丸には評定所、米蔵、武家屋敷が連なっていたが、廃藩置県にともない東京に移住した旧藩主、稲葉家の臼杵滞在所として一九〇二年（明治三十五）に建てられたものが稲葉家別邸である。近代建築ではあるが、武家屋敷の様式を色濃く残している。

大書院（国登録有形文化財）

玄関が表（客用）と内（家人用）に分けられていたり、上の間には長押が回されていたりするなど武家住宅の特徴を残している。

御居間棟・台所棟（国登録有形文化財）

この御居間棟の「居間」は当主の御座所として使用されていた。床の間や長押、土間の吹き抜けが武家屋敷の格式を伝えている。

土蔵・御門・外堀・東門（国登録有形文化財）

土蔵には一時、稲葉家所有の重要な資料が収められていたといわれる。外堀は「下見板張り」の姿を受け継ぎ、土塀の支柱と基礎部分には地元産と思われる「灰石（阿蘇溶結凝灰岩）」が用いられている。

4. 野上弥生子文学記念館

代表作「海神丸」「真知子」「迷路」「秀吉と利休」などで知られる小説家、野上弥生子の生家に作られた記念館。野上弥生子は一八八五年（明治十八）この地にあった酒造業の代屋（現小手川酒造）の二代目、小手川角三郎の長女として生まれた。十四歳で上京し、明治女学院に入学。卒業後、二十一歳で同郷の野上豊一郎（後に法政大学総長）と結婚する。夏目漱石に師事する豊一郎の影響で小説を書き始め、九十九歳まで数々の名作を世に送り出した。昭和四十六年に文化勲章を受章。昭和六十年逝去。記念館は翌六十一年九月に小手川酒造の一部を改修して開館。弥生子の幼少期から晩年までの遺品約二〇〇点を展示している。隣接する「久家の大蔵」は一八六八年（慶応四）に作られた「久家本店」の貯蔵庫で、現在は改修され、ギャラリーとして開放されている。

ポルトガルの陶板「アズレージョ」による十四枚の壁画で外壁が装飾されており、ポルトガル人作家ロジェリオ・リベイロ氏（リスボン大学教授）が描いた天使や聖職者、大友宗麟など華やかなキリシタン文化が描かれている。

5. 二王座歴史の道

阿蘇溶結凝灰岩でできた丘陵地帯の狭い路地に、石畳が敷かれ、石垣に土塀や白壁の武家屋敷や寺院が建ち並び、城下町の風情ある町並みが残されている。祇園社の仁王門があったことから「二王座」と名付けられたとの説があるが定かではない。周辺には三十あまりの寺院が集まっており防御施設としての「寺町」として形成されていた。平成五年に国の都市景観一〇〇選に選ばれている。

6. サーラ・デ・うすぎ

市内中心地に作られた多目的交流施設。サーラとはポルトガル語の「居間・サロン」を意味している。館内には南蛮文化展示コーナーが設けられており、大友宗麟の使用した大砲「国崩し」のレプリカをはじめ、南蛮文化をテーマにした展示がされている。

7. 国宝白杵石仏

正式名称「白杵磨崖仏群(四群六十余体)」。一九五二年(昭和二十七年)国の特別史跡に指定。一九八〇年(昭和五十五年)から十四年間に及ぶ修復保存工事が行われ、一九九五年(平成七)四群五十九体が国宝に指定される。磨崖仏では初の彫刻においても九州初の国宝となった。造営の時期などはあきらかになっていないが、様式から平安後期から鎌倉時代のものと推定される。阿蘇山の火砕流による凝灰岩に彫られているため脆く、損壊が目立つ。そのため代表的な磨崖仏である古園石仏中尊の大日如来像は、ながらく仏頭が仏体下の台座に置かれた状態で親しまれていたが、仏頭の修復が国宝指定の条件となったため一九九四年(平成六)に修復された。現在は、これ以上の劣化を防ぐために最先端の技術で保存維持管理されている。代表的な石仏を以下に挙げる。

(1) 九品の弥陀像(ホキ石仏第二群・平安末期頃作)

比較的小さな九体の阿弥陀如来像が刻まれている。中央の一尊だけが裳懸座もかけざに座し、彩色も鮮やかに残っているが、他の八体は欠損がひどく惜しまれている。

(2) 阿弥陀三尊像(ホキ石仏第二群・平安後期頃作)

見事な彫技で、白杵石仏のなかで最も優れた石仏の一つに数えられる。なかでも中尊の阿弥陀如来像は量感の豊かな傑作である。

(3) 地藏十王像(ホキ石仏第一群・鎌倉期作)

中尊に地藏菩薩をすえ、十王像を左右に五体ずつ配している。錫杖しゃくじょうを持たず、右足を座し左足を立てている地藏菩薩は、古い様式では珍しく、光背の彩色唐草紋も残っている。

(4) 如来三尊像(ホキ石仏第一群・平安末期頃作)

中尊に金剛界大日如来を配し、右に釈迦如来、左に阿弥陀如来が配されている。三尊ともに膝前しつぜんが長く広いのが特徴で、台座には願文や経文を納める円形や四角形の孔がある。

(5) 如来三尊像(ホキ石仏第一群・平安後期頃作)

ホキ石仏第一群の代表的な石仏。中尊の阿弥陀如来は眉、目、髭が墨で描かれ、彫技の優れた量感あふれる作風が特徴的である。

(6) 如来三尊像(ホキ石仏第一群・平安末期頃作)

中尊に釈迦如来を刻み、螺髮らふつなどの簡略化された

作風が、素朴な印象を与える。

(7) 山王山石仏さんのおうざん（平安後期頃作）

三体からなり、中尊に大きな如来座像、左右の脇尊にも如来座像が配された珍しい形式である。「隠れ地藏」とも呼ばれる。

(8) 古園石仏（平安後期頃作）

白杵石仏のなかでも最もよく知られている大日如来像が中尊として配されている。端正で気品あふれる表情が特徴的な傑作。



大日如来像



白杵城跡